【研究論文】

祭礼の地域的展開

―徳島県海部郡由岐町の事例より（一）

高橋　晋一

一　はじめに

徳島県海部郡由岐町の各地区（伊座利、阿部、志和岐、西の地、東由岐、西由岐、田井、木岐）には、現在も個性豊かな祭りが伝承されている（図1、表1）。もちろん、「県南漁村地域の祭り」という点では、周辺地域との共通性も多いが、それ以上に「由岐町の祭り」としての地域性がよく出ていると言える。さらに由岐町内各地区の祭りを仔細に見てみると、付帯する芸能、祭り歌、山車、神幸行列など、それぞれに地区ごとの特色が現れている。それは各地区の地理的環境・歴史的環境（特に地域間交流の歴史）が創り出した祭りの姿と言ってもよい。

由岐町の祭りのうち、西由岐八幡神社祭礼については、徳島文理大学比較文化研究所による調査報告書［徳島文理大学比較文化研究所年報編集委員会　一九八八］、および佐藤文哉の論文［佐藤　一九八二］、木岐八幡神社祭礼については徳島文理大学比較文化研究所の調査報告書［徳島文理大学比較文化研究所年報編集委員会　一九八八］に概略が紹介されているものの、その他の地区（伊座利、阿部、志和岐、西の地、東由岐、田井）の祭りの実態については、これまでまとまった形で紹介されることがなかった。本稿では、由岐町各地区の祭りの概要を紹介し、その上で由岐町の祭りの地域的特質を、特に周辺地域との文化交流という視点に着目しながら明らかにしたいと考えている。

今回取り上げるのは、由岐町内八地区の祭りのうち、西の地の岡崎神社祭礼、木岐の八幡神社祭礼、志和岐の吉野神社祭礼、伊座利の新田八幡神社祭礼の四つの祭りである。次稿「祭礼の地域的展開―徳島県海部郡由岐町の事例より（二）」（『徳島地域文化研究』三号掲載予定）では、西由岐の八幡神社祭礼（1）、東由岐の天神社祭礼、田井の白鳥神社祭礼、阿部の宮内神社祭礼を取り上げ、最後に由岐の祭り全体に関する考察を行いたいと考えている。

なお、今回紹介する四ヵ所の祭礼に関する調査（聞き取り調査および観察調査）は、いずれも平成一五年（二〇〇三）に実施したものである。

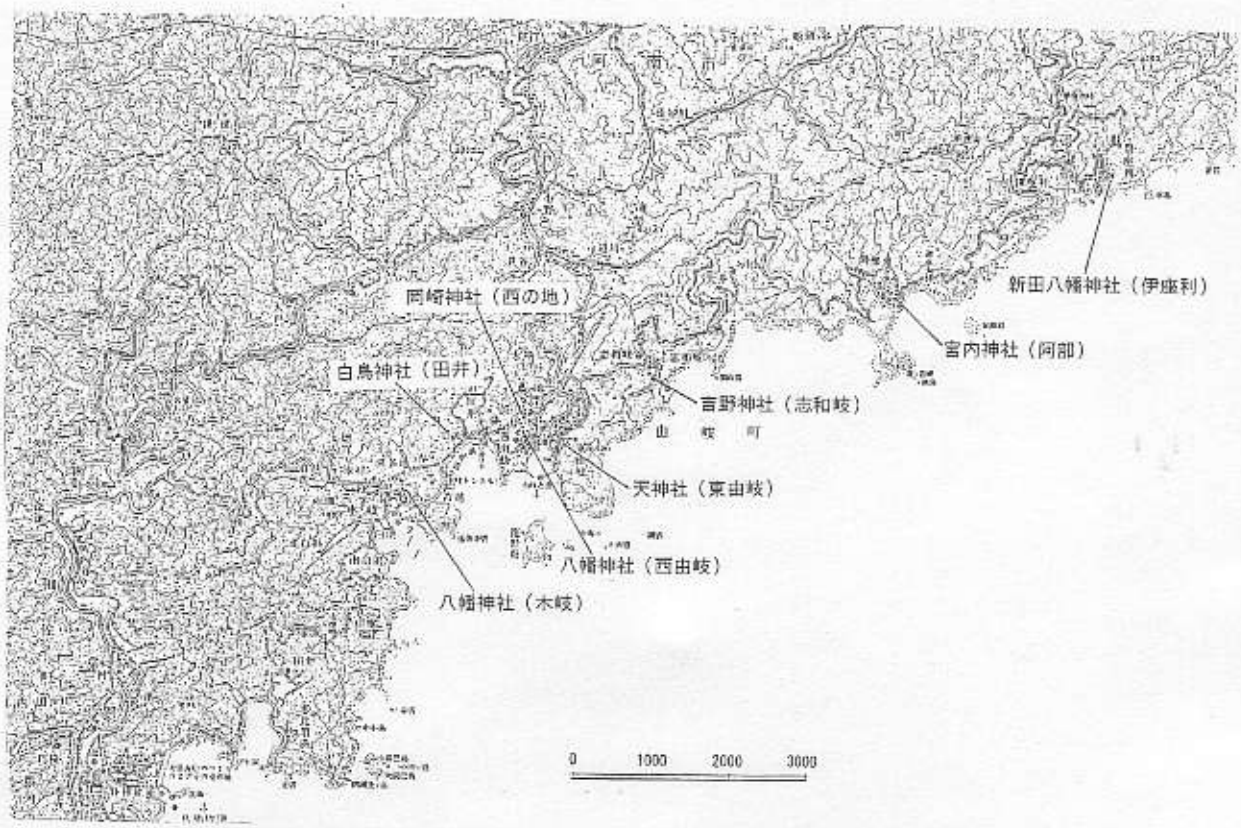

図１　由岐町神社分布図（国土地理院発行５万分の１地形図「日和佐」を基に作成）

表１　由岐町神社一覧

番号	神社名	所在地	祭神	旧社格	創建年	例祭日
1	新田八幡神社	海部郡由岐町伊座利字向山1の1	品陀和気命、気長足姫命、武内宿禰命	村社	創立年代不詳。	10月14・15日
2	宮内神社	海部郡由岐町阿部字東谷3の2	天之吹男命、健速須佐之男命、八十枉津日命	村社	創立年代不詳。もと同社所蔵の大般若経に康和5年（1103）の年紀あり。	9月24～30日
3	吉野神社	海部郡由岐町志和岐浦字中の谷177	大己貴命、広国押建金日命、春日山田姫命	村社	不詳。天和3年（1683）再建の記録あり。	10月9日に近い土・日曜
4	岡崎神社	海部郡由岐町西の地字西地49の1	猿田彦命	村社	慶長3年（1598）奉祭と伝える。	9月13・14日
5	天神社	海部郡由岐町東由岐字本村28の1	菅原道真公	村社	創立年代不詳。元禄11年（1698）、現社地に遷座した由の棟札がある。	7月23～25日
6	八幡神社	海部郡由岐町西由岐字後山25の1	品陀和気命、気長足姫命、武内宿禰命	村社	天正17年（1589）、石清水八幡宮の分霊を祀るという。	9月14～16日
7	白鳥神社	海部郡由岐町田井字白鳥799	日本武尊	村社	創立年代不詳。文化3年（1806）の棟札あり。	9月第2土・日曜
8	八幡神社	海部郡由岐町木岐字北地946	品陀和気命、気長足姫命、武内宿禰命	村社	創立年代不詳。大永6年（1526）の棟札あり。	9月14・15日

二　西の地・岡崎神社祭礼

（一）岡崎神社について

岡崎神社（写真1）は海部郡由岐町西の地字西地四九の一に鎮座する。旧村社。祭神は猿田彦命。

もと岡崎大権現と呼ばれ、慶長三年（一五九八）の奉祭と伝える。文化一二年（一八一五）編纂の『阿波志』に「岡崎祠西由岐村に在り」と見える。明治四一年（一九〇八）に炊殿を新築、昭和六年（一九三一）には本殿や拝殿が新築され、同八年JR牟岐線延長のため炊殿・拝殿・だんじり倉庫を移転した。戦後まもなく宗教法人となり、昭和五六年（一九八一）に幣拝殿を新築した［岡島　二〇〇〇　一四五］。

写真1　岡崎神社（西の地）

境内社に馬留神社（祭神・須佐之男命）、秋葉神社（祭神・訶遇槌命）、龍王神社（祭神・和田津美命）、生目神社、地神社がある［岡島　一九九七　一二九～一三〇］。

（二）祭祀組織

岡崎神社の氏子区域は西の地地区全域で、氏子数（世帯数）は現在二四三戸である。

岡崎神社の世話役（神社総代）は現在五名。神社総代は町内会の中の適当な人に頼んでなってもらう。任期は二年であるが、再任を妨げない。

祭りの実際の世話をする人を「当家（とうや）」と呼ぶ。西の地町内会（平成一五年現在二四三戸）内には一八の隣組があるが、そのうち二、三組をセットにして当家をお願いしている。その年の当家に当たる家は、二〇～三〇軒くらいである。

当家に当たった地区（二、三の隣組）の全戸が祭りの世話に当たる。ただしブク（服喪）の家は除く。昔は当家は男性しかなることができなかったが、人手不足により、一〇年ほど前から女性も当家に加わることができるようになった。当家は一年交代で、秋祭り終了後に西の地公民館で行われる打ち上げの際、引継ぎをする。当家に当たった家では、祭りの日に家の前に提灯（御神燈）または幟を飾る。しかし提灯や幟は、昔からある家くらいしか持っていない。

当家の中の責任者を「本当家」と呼ぶ。本当家の選出方法は、当家に当たっている隣組の当番（隣組内の世話役）がなったり、くじ引きで選んだりと、その年の当家によって異なる。

岡崎神社の秋祭りには、神輿とだんじりが出る。神輿かきは、氏子の青年（かつてはワカイシ）十数名が担当する。

だんじりの上には「内子」（西の地では「打ち子」ではなく「内子」と言う）が乗り込み楽を奏する。鳴り物は大太鼓一、小太鼓二、小鼓二、大鼓二、鉦三の計一〇名で、小学生男子（いずれも西の地町内の子供）が担当する。これまで女子が内子を務めたことはない。大太鼓は年長者（リーダー）、鉦は低学年（二年生）が叩く。内子は以前は地域の小学生の中からく

じ引きで決めていたが、現在は青年団が子供のいる家庭に頼みに行っている。

祭礼のための特別な経費というものはなく、町内会費の一部を充てている。町内会費は、祭礼以外にも運動会や町の文化費、体育費などに使われる。不足分については町から補助が出る。

（三）祭りの過程

a．準備

岡崎神社の例祭（秋祭り）は毎年一〇月一三（宵宮）・一四日（本祭）に行われている。

昔は「ナラシ」と言って、祭りの始まる一ヵ月ほど前から毎日地区の家を順番に回ってだんじりのお囃子の練習をした。現在、だんじりのお囃子の練習は五月頃より西の地公民館で、週一回のペースで行っている。以前はお囃子を知っている年輩の人が指導に当たっていたが、現在は青年団が直接子供の指導に当たっている。以前はお囃子の譜面などはなく口伝えであったが、現在は伝承のため譜面を作っている（章末資料参照）。

祭りの前日（九月一二日）、当家が中心となって岡崎神社の社殿や境内の清掃、幟立て（参道沿いに二〇本ほど立てる）、神輿・だんじりの飾り付けなどの準備作業を行う。だんじりの上部・下部に赤い幕を張り、左右の軒下に二〇個あまりの提灯を吊し、後部に長さ五メートルほどの笹竹二本を固定する。笹竹には子供たちの願い事を書いた短冊をくくりつける。だんじりは二層一階の構造で、前部に取り付けられたロープを引いて動かす。

b．九月一三日（宵宮）

正午より岡崎神社拝殿にて例大祭の神事が行われる。神職（西由岐八幡神社の古川禰宜）のほか、神社総代、当家、神輿かきらが参列。

神事終了後、神職は警蹕をかけながら御霊代を本殿から神輿に奉遷する。白の浄衣姿で運動靴（かつては草鞋履き）を履いた神輿かき（西の地の青年一四名）に担がれた神輿が氏子区域の巡幸に出発する（写真2）。

神輿のお供は、潮祓い一名（榊の枝でバケツに入った海水を撒きながら神輿を先導する）、長さ三メートルあまりの青竹のササラ（下部二分の一を割き、地面に叩きつけたときバーンという音がするようにする）を持った赤鬼・青鬼[2]各一名（写真3）、御幣を捧持した神社総代五名（裃姿、草履履き）、長刀や弓などの

写真2　神輿巡幸
（西の地・岡崎神社）

写真3　鬼（西の地・岡崎神社）

神幸具・威儀物を捧持した当家十数名（平服の上に揃いの青い着物を着る）、草鞋持ち一名（昔は神輿かきは草鞋を履いていたため、傷んだ草鞋の替えを持っていた。現在はタバコを持っている）、鏡持ち一名（鏡を持って巡幸に付き従う）、餅持ち一名（重ね餅を持って巡幸に付き従う）、台持ち二名（神輿を据え置くための台を持つ）、水差し数名（神輿かきに水を補給する。現在はバケツで神輿かきに水をかけたりする）、神職（西由岐八幡神社の古川禰宜）などである。昔は神幸の列次もきちんとしていたが、近年はかなり崩れている。

なお、赤鬼・青鬼は由岐町内では隣接する西由岐八幡神社祭礼にも登場し、両地域の民俗の関連性が見て取れる。

神輿かきは絶えず「チョーサ、チョーサ」という威勢よいかけ声を掛けながら進む。神輿は神社を出た後、一度御旅所（由岐町保育所北側の消防団第三分団詰所）に据え置かれ、神職により祝詞が奏上される。赤鬼・青鬼が備え付けのホースで神輿かきに水を浴びせかける。

小休止の後、神輿は町内巡幸に出発する。神輿はまずその年の本当家の家に立ち寄る。その後町内会長の家に寄り、以下、地区内の家々（あらかじめ依頼のあった家）を順に回っていく。神輿は昔から、本当家・町内会長・一般の家の順に回っていた。

神輿が目指す家に到着すると、神輿のハナ（先端）を玄関先に突っ込むように据え置く。神輿の前部のかき棒の上に台を置き、その上に鏡（鏡持ちが持つ）、重ね餅（餅持ちが持つ）を置く。家の人は神饌（酒・米・餅の三種）を供える。神職は玄関先で神輿に向かって祝詞を奏上する。

祝詞奏上が終わると、家の人は供物を下げる（徳利に入った酒は神輿にかける）。家によっては、神輿かきとそのお供に対して酒食のもてなしがある。その間神輿かきは玄関先や路上に座って休憩しているが、ときおり水差しや、赤鬼・青鬼がバケツに入った水を神輿かきに向かってかけたりして場がにぎやかになる。

頃合いを見て神輿かきは神輿を担ぎ、「チョーサ、チョーサ」のかけ声とともに次の家へと出発する。水差しの人、あるいは赤鬼・青鬼がときに神輿かきにバケツやホースで威勢よく水をかける。神輿が家の玄関先に走り込む際には、「チョーサ、チョーサ」のかけ声（通常の巡幸時のかけ声に比べてかなりテンポが速い）とともに勢いを付けて走り込んでいく。家の前で「サセー、サセー」のかけ声を掛けながら神輿を（腕を伸ばして）高々と差し上げる動作をするときもある。順次定められた家を回り、神輿は夕方御旅所に戻る。各日（宵宮と本祭）ともそれぞれ数十軒の家を回るが、回る家の数は以前とあまり変わりない。

夜一八時より、神社下を出発点としてだんじり（写真4）が町内を巡行する。だんじりの製作年代は不明だが、少なくとも戦前からあった。だんじりは普段は神社の倉庫に収納してある。解体はせずに、上部の角（一対）だけを外してしまっている。

だんじりの巡行は約四〇年前に中断したが、青年団を中心として復活させようという機運が高まり、七年前に復活

写真4　だんじり（西の地・岡崎神社）

した。以前のだんじりは木のコマ（車輪）で、木の棒を使って操作していたが、アスファルトが傷むという理由から使用をやめていた。現在は車輪をゴムタイヤに換え、方向転換のためのハンドルを付けて復活した。

だんじりの上には「内子」が乗り込み楽を奏する。だんじりの進行方向に向かって最前部に大太鼓、その後ろに小太鼓二、小鼓二、大鼓二、鉦二の順に着座する。お囃子の最後の部分（テンポの速い部分）を「打込（うちこみ）」と言う。内子はだんじりが停まった場所でお囃子を三回繰り返し、最後に打込を入れる。

だんじりの引き手は老若男女三〇人ほど。西の地の人なら誰でも引くことができる。

だんじりはあらかじめ定められた巡行ルートを進む。だんじりの止まる場所には御神燈が掲げられている（夜は灯をともす）。だんじりが止まった場所で内子がお囃子を奏する。御神燈は（地域の人から）希望があった場所や、取り付けやすい場所に設置する。だんじりが止まっている間、近所の人たちによって飲み物や食べ物が振る舞われる。

だんじりの横に付いている大人がかけ声をかけると、だんじりの動きが変わる。かけ声には「ハイラー」（早く進め）、「ハイラー、ハイラー、ハイラー」（猛スピードで進め）、「ヨッコニセー」（横にしろ＝曲がれ）などがある。「ハイラー」というかけ声が入ると内子の叩く楽のリズムも早くなり、引き手は全速力で走りながらだんじりを引く。

二〇時過ぎにだんじりが神社に戻ってくる。だんじりを神社境内前（JR牟岐線線路脇）に据え置き、この日の行事は終了する。

c．本祭（九月一四日）

朝八時、神輿が御旅所を出発し町内を巡幸する。前日同様、潮撒き、赤鬼・青鬼が神輿を先導し、草鞋持ち、鏡持ち、餅持ち、台持ち、御幣を持った神社総代、神幸具・威儀物を持った当家、水差し、神職が神輿のお供をする。神輿は希望した家を順に回り、神職がご祈祷（祝詞の奏上）をする。各家では飲み物などのもてなしがある。

巡幸を終えた神輿が神社に戻り、「お入り」（還御）するのは二〇時過ぎとなる。昔からお入りはこのくらいの時間であった。最後、神輿は境内から拝殿に至る石段を上ったり下りたりしてなかなかお入りしない。

神輿かきは最後の力を振り絞り「チョーサ、チョーサ」のかけ声とともに神輿を高々と差し上げて一気に階段を駆け上がり、ようやくお入りとなる。神職、神社総代らは神社拝殿に参進、着座。神職は警蹕をかけながら神輿から本殿に御霊代を奉遷し、祝詞を奏上して祭礼は終了する。

本祭の日は、だんじりの巡行は行われない。あらかじめ希望のあった町内の十数軒の家を内子が順に回り、お囃子を披露する。このような習慣は昔はなく、七年前にだんじりが復活してからのことである。

［資料］岡崎神社だんじりの譜面

ドンドンドン　カタカカタカカタカタ　ドン　カタカタ　ドン　「ヨーイヤ」
テンテレズクズッテンテン
ポポ　ダ　ポンポポ　「アイヤ」
ダダダ　ダダ　ポポ　ダ　ポポポ　ダダ　ポポ
ズッテン　ドン　チキ　ツク　ダッ　ツク　ポポ　ダッ　テン　ポポ
ダン　ポ　ダ　ポポ　ダ　ポ　ダ　ポ　ダダ　ポ　ポポ
ダ　ポポ　ダダダ　ポポ　「ハア」
テン　ポポ　テン　ダ　ポ　テンテン　テレズク　ズッテン

タタ　ポポ　タ　ポポ　タタ　ポポ　テン
チキチキチン　タタタ　ポポ　「アコリヤ」
タッタタッタタ　ポポ　タッタタ　ポポ
ツク　タ　ポ　デン　チキ　ドン　チキチン
チキチキチキチキ　スッテンテン　「オイ」
ポンポ　タ　ポポ　ポポ　タ　ポポ
タタ　ポポ　タタ　ポ　タン　ポ　タ　ポ　ポポポン　タ　ポポ　ドンドン
タタ　ポポ　ステステ　テンテン
チキチキチッキン　スッテン　ステステ　ズクズク
タ　ポポ　タ　ポポ　タタタ　ポポ　タタ　ポポ　タタ　ポ
テレズク　テレズク　ズクズク　テンテン
ポ　タ　ポン　ポ　タ　ポン　ポ　タタ　ポポ
ポ　タ　ポ　タ　ポ　タ　ポ　タ　ポ　タタ　ポポ　「アーコリヤ」
タッタタッタタ　ポポ　タッタタ　ポポ
テレズク　テレズク　テンテン　ズクズク

打込

ポ　タ　ポポ　タ　ポ　タ　ポポ　タタ　ポポ　「アーコリヤ」
タタ　ポポ　タタ　ポ　タ　ポンポンポン　タタ　ポンポンポン
タタ　ポポ　タタ　ポ　タ　ポ　タ　ポ　タタ　ポポ　タタ　ポ　タ　ポポ　タタ
ポポ　タ　ポポポン
ツクズッテン
ドン　カタカ　ドンドン　ドン　カタカ　ドンドン
コン　チキチ　コンコン　コン　チキチ　コンコン

（凡例）
太太鼓
小太鼓
小鼓
大鼓
鉦
かけ声

三　木岐・八幡神社祭礼

（一）木岐八幡神社について

八幡神社（写真5）は海部郡由岐町木岐字北地九四六に鎮座する。旧村社。祭神は品陀別命、気長足姫命、武内宿禰命。

寛保三年（一七四三）の『阿波国神社御改帳』に「木岐村八幡宮　別当木岐村真福寺　神主田井村惣大夫」と見える「神道大系編纂会

写真5　八幡神社（木岐）

一九八九　三四]。また文化一二年（一八一五）の『阿波志』には「八幡祠木岐浦に在り」とある。

創建年代は不詳であるが、「大永六年（一五二六）九月十五日」と書した棟札を存す［徳島県神社庁教化委員会　一九八一　二三一］ことから、それ以前の創建とわかる。明治初年に現社号に改め、戦後まもなく宗教法人になった［岡島　一九九七　一三〇］。

飛地境内社に日吉神社（西町三六三、天忍穂耳命）、荒神社（西町三六三）、八坂神社（東町潟）がある［岡島　一九九七　一三〇］。

（二）祭祀組織

八幡神社の氏子数は約二五〇戸。氏子区域は、かつて「ハマ」と呼ばれていた漁村地域の東（東町）・西（西町）（旧木岐浦）と、農村地域の奥・白浜（旧木岐村）からなるが、祭礼執行の主体は前者にある。

祭りの運営は神社総代（一三名）が中心になって行い、当家がその手伝いをするという形をとっている。現在の神社総代の代表者（総代長）は賀川末夫氏。神社総代の任期は不定で、実際には終身職となっている。定員に空きが出たら適任者に頼みに行く。

当家は氏子区域のうち東・西から出る。東・西はそれぞれ一二の隣組に分かれているが、そのうち東三、西三の計六つの隣組が輪番（一年交替）で当家に当たる。したがって当家は四年に一回回ってくることになる。

神輿かきは、昔はワカイシ（青年団）の中の希望者が当たっていた。神輿かきの人数は現在は二〇人程度であるが、昔は三〇～四〇人くらいで担いでいた。高校を出たら神輿かきを務める。外に働きに出ている人も祭りのときには帰ってきて神輿をかいてくれる。

戦前にはだんじり三台（東・西・奥）が氏子区域を巡行していた。だんじりの上には各地区の子供が打ち子として乗り込み、大太鼓、締太鼓、大鼓、鉦、横笛で楽を奏した。

（三）祭りの過程

a．準備

八幡神社の秋祭り（例祭）は毎年九月一四（宵宮）・一五日（本祭）に行われている。

祭り前日の九月一三日、神社・境内の飾り付け、御神燈の設置、御旅所の設置、だんじり（写真6）の引き出しと飾り付けなどの作業が行われる。

神社の社殿や境内を掃除し、拝殿の入口と鳥居の脇に短冊の飾りの付いた笹竹を結びつける。

町内の辻ごとに笹竹を立てて御神燈（夜間は灯がともる）を吊し、神輿の通る道筋には榊の小枝が挿され、途中に墓地などがあれば注連縄を張って結界する。こうした準備作業を含め、祭りの実際の運営は、かつてはシュクロウ（宿

写真6　だんじり（木岐・八幡神社）

老）と呼ばれる中年層の指示に従い、ワカイシ（若い衆）が行っていた［徳島文理大学比較文化研究所年報編集委員会　一九八八　一二八］。

御旅所は、東町の南の外れの防波堤近くに設けられる。木材を組んで小屋を造り、周囲をビニールテントで覆う。御旅所の四隅には短冊の結びつけられた笹竹が縛り付けられる。御旅所の正面上部には八幡神社の紋の入った幕を飾り、注連縄を張る。御旅所前の左右には御神燈一対を吊す。また、青地に白で「八幡神社」と染め抜かれた幟一対を立てる。

東・西の当家は、それぞれの地区のだんじり（普段は神社隣の倉庫に保管されている）を引き出し、幕、提灯、笹竹（短冊を飾り付ける）などの飾り付けをする。だんじりは破風屋根の付いた二層一階の構造をなしており、前部に付けられたロープを引いて動かす。屋根と欄干には彩色がほどこされており、阿部や西の地のだんじりに比べ底部が高く造られている［徳島文理大学比較文化研究所年報編集委員会　一九八八　一二九］。

飾り付けの終わっただんじりは、御旅所の手前まで引いていく。二台のだんじりを防波堤の際に並べて据え置く。

戦前には東・西・奥の三台のだんじりが出ていた。だんじりの製作年代は明治頃と言われている。

かつて神輿回し（神輿かき）の青年（ワカイシ）たちは「火を切る」と言って神社石段下の建物に籠もり、食事も家庭で煮炊きしたものは食さず、釜を据えて所帯をした［徳島文理大学比較文化研究所年報編集委員会　一九八八　一二八］。こうした潔斎の意識は次第に弱まっているが、現在でも宵宮の日の朝、神輿かきは海に入って潮水で身を浄めている。

b．宵宮（九月一四日）

宵宮の日（九月一四日）は、正午より神職（宮本篤宮司）、神社総代、神輿かき代表、子供神輿代表（男女各一名）、赤鬼・青鬼、長刀担当者が拝殿に参進し、例大祭の神事が行われる。神事終了後、神職は警蹕とともに本殿より御霊代を神輿に奉遷する。

神事が行われている間、神社の石段下では獅子舞の奉納（写真7）が行われる。木岐の獅子舞は、那賀郡那賀川町原から伝習したものであるといい、昭和三〇年代に原から代表が二人ずつ約一ヵ月間、木岐の消防団の詰め所へ通って教えたという［高嶋　二〇〇三　一二五］。しかし、徳島文理大学比較文化研究所の調査報告書には、木岐の獅子舞は昭和三〇年頃に由岐町東由岐から伝習したものであり、さらにさかのぼれば那賀郡羽ノ浦町のものであると書かれている［徳島文理大学比較文化研究所年報編集委員会　一九八八　一二八］。筆者も聞き取り調査の中で、東由岐から伝習したとの話を聞いており、当時、那賀川町原、東由岐の両方から舞の指導を受けていたとも考えられる。木岐の獅子舞は、肩担ぎ、のたうちなどアクロバティックな動作が入る点に特色があるが、その演技は那賀川町原、羽ノ浦町東傍示に伝わる獅子舞と共通したものがある。

獅子は以前は一頭だったが、「立ち獅子」が始まった

写真7　獅子舞（木岐・八幡神社）

昭和四〇年頃から二頭になった。獅子は頭と後に一人ずつ入り、計二人で回す。獅子はかつてはワカイシ（青年団）が担当していたが、現在は高校生・大学生がやっている。獅子舞の練習は、祭りの一ヵ月ほど前から公民館で行っている。経験者が指導に当たる。

獅子舞は演技によって一頭立て、二頭立ての別がある。二頭立ての演目には子役（両手に采を持ち、獅子を操る）二名、一頭立ての演目には子役一名が付く。子役は現在、小学三、四年生が務めている（二〇年ほど前は小学五年生が務めていた）。胸に八幡神社の紋の入った水色の着物の上に華やかな模様の入った赤い上着を羽織り、薄紫と水色の縞模様のズボンをはく。両手首と足首には水色の布（手甲・脚絆の代わり）を付け、頭に八幡神社の紋の入った水色の頭巾を被る。足元は白足袋に草鞋履きである。顔には化粧をし、鼻筋に白い白粉を付ける。また眉間に小さな点二つを書く。

地面にチョークで二間四方の四角形を描き、獅子と子役はその範囲で演技する。獅子舞のお囃子は太鼓一台（平服）である。

最初の演技は一頭立ての獅子舞で、子役一人が付く。寝そべった獅子の頭を子役が手に持ったザイ（二本）で叩いて起こし、ザイを振りながら獅子を左右に操る。獅子は最後、後ろの人を軸として寝そべった形で反時計回りに大きく二回回り、退場する。

次の演技は一頭立ての獅子舞で、子役は付かない。太鼓と三味線（お囃子の入ったテープを流す）に合わせて演技を行う。最初うずくまっていた獅子が立ち上がり、四角形の周囲を反時計回りに二回回る。その後獅子の使い手が肩車をして「立ち獅子」の状態となり、その場で反時計回りに二回回る。続いて使い手二人が背中合わせになった状態で背中を反らし、その場で反時計回りに二回回る。獅子は四角形の周りを首を前後に振りながら回る。途中「のたうち」（獅子が寝そべってごろごろ転がる）の動作が二回入り、最後、中腰の状態で跳ねながら退場する。

最後の演技は二頭立ての獅子舞で、子役二人が付く。いきなり二頭の獅子が子役の前に回り込み、子役がザイで獅子の頭を激しく叩くところから演技がはじまる。一度寝そべった獅子が立ち上がり、子役の動きに合わせて前後左右に軽やかに跳ねる。その後、獅子は互いに向かい合って前後左右に跳ねたり、絡み合う動作をする。その間、子役は獅子の間を縫うように回る。獅子はいったん寝そべり、子役がザイで叩いて獅子を起こす。獅子は四角形の中を首を振りながら走り回る。最後に子役と獅子が向かい合い、子役がザイで獅子頭を叩くと立っていた獅子がしゃがみ込み、演技が終了する。この三番目の舞は特にテンポの速い、非常にダイナミックな演技である。演技は一二時四〇分頃終了し、一同その場で小休止する。

獅子舞はこの後、橋の上、商店の前、漁協の前など、地区内の決まった場所（東町、西町の五ヵ所あまり）に移動して舞を披露する。なお獅子舞は神輿とは別行動を取る。

一二時四〇分、境内の集会所前で、阿南市桑野の「たたら音頭保存会」のメンバー三名による「たたら音頭」の奉納がある（写真8。歌詞の一例は章末の資料を参照）。揃いの水色の法被を着て、手には拍子木、または采（長さ五〇センチほどの竹の棒の先に赤・黄・緑・白といったカラフルな布を縛り付けたもの）二本を持っている。

保存会の人たちは、拍子木を叩いてリズムを取りながら、たたら音頭のレパートリーの中から適当な歌（章末資料参照）を歌う。歌は途中から伊勢節（章末資料参照）に変わり、最後に木岐八幡神社の名前を入れ込んだほめ歌を歌い、終わりとなる。

桑野のたたら音頭保存会は、地域の伝統文化を受け継ごうと二〇年ほど前に発足。要請があればどこにでも歌いに行く。木岐の祭りには一〇年ほ

ど前から呼ばれており、四、五年の中断があったが、平成一五年の祭りには久しぶりに呼ばれたという。それ以前は阿南市福井の和淵花楽（本名国太郎）ら二人が招かれていた［徳島文理大学比較文化研究所年報編集委員会　一九八八　一二九］。

一三時、境内（石段上）でもち投げが行われる。石段下には一〇〇名近い氏子（老若男女）が集まり、餅の投下を待っている。合図とともに石段の上から神社総代、神輿かきが一斉に餅を投げると、氏子たちは餅を奪い合う。

写真８　たたら音頭（木岐・八幡神社）

餅投げ終了後、神輿が巡幸に出発する（写真９）。白の浄衣を着て白足袋・草鞋履きの青年たちに担がれた神輿が石段を下りてくる。一五〇センチほどの榊の枝で作った大麻（三種の神器のうち鏡が結びつけられている）を捧げ持った神輿かきの代表一名が神輿を先導する。

神輿が石段を下りた時点で隊列を整え、御旅所まで移動する。赤鬼・青鬼（各一名）、長刀（六名）、大麻（一名）が神輿を先導し、御幣を持った神社総代、金幣、神輿の台などの道具を持った当家、神職が付き従う。たたら音頭保存会の人も神輿に付いて歩く。

途中まで、小学四～六年生の男女一五名あまりによって担がれた子供神輿も参加する。子供神輿のかき手は揃いの青い法被を着て、白足袋・草鞋履き、頭に手拭いの鉢巻きを締めている。子供神輿は、祭りににぎわいを取り戻そうという雰囲気の中から、二、三年前にできたものである。

子供神輿は途中で神輿と分かれ、別ルートを巡幸する。神輿を担いでいる子供の家の近所を回るようにルートを組むため、細かいルートは毎年異なる（平成一五年は御旅所→木岐小学校→木岐公民館→木岐漁協→白浜→御旅所というルートであった）。

平成一四年から、木岐保育所の保育園児（男女）一五名あまりによる子供神輿（段ボールと紙で作ったもの）二基も参加するようになった。子供たちは白の浄衣に運動靴、白はちまき姿で、保育所の先生が先導する。

赤鬼・青鬼は男子中学生が務める（かつてはワカイシ）。赤鬼・青鬼の面を被り、赤・青の衣装（全身）を着け、白足袋を履き、長さ五メートルあまりの青竹のササラを持って歩く（写真10）。腰には太い注連縄を付け、渋柿・椀の蓋・茶の葉が入った布袋を下げている。渋柿は、これを食えば鬼のような面相になるからだと言い、椀の蓋は酒を飲むためだと言われているが、渋柿

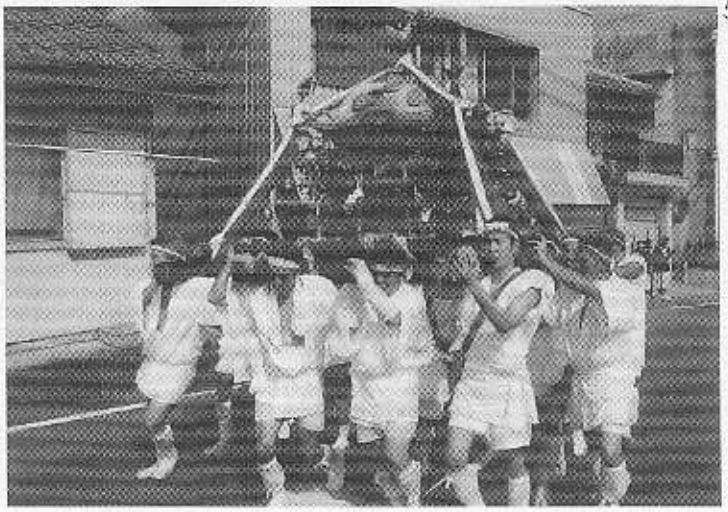

写真９　神輿巡幸（木岐・八幡神社）

や茶の葉にはもう少し呪的な意味があったものと思われる［徳島文理大学比較文化研究所年報編集委員会　一九八八　一二九］。由岐町内では西由岐の八幡神社祭礼、西の地の岡崎神社祭礼でも赤鬼・青鬼がササラを持って神輿を先導しており、文化的な連続性が見て取れる。

長刀（写真11）はかつては一六～一七歳のコワカイシ（小若い衆）の担当であった［徳島文理大学比較文化研究所年報編集委員会　一九八八　一二九］が、ワカイシの減少にともない、現在は中学生女子（一～三年生）が担当している。昔はワカイシの組が東町・西町ともにあったので、くじ引きで担当者一二名を選出していた［徳島文理大学比較文化研究所年報編集委員会　一九八八　一二九］。

写真10　鬼（木岐・八幡神社）

写真11　長刀（木岐・八幡神社）

長刀の担当者（八名）は二列縦隊になり、ゆっくりと演技をしながら進んでいく。衣装は、黒の上着の上に黄色いタスキを締め、白のズボン、白足袋を履き、頭に黄色い鉢巻きを締めるが、代表者（一名）だけはタスキと鉢巻きの色が水色となっている。代表者は背の高さや経験（過去に長刀を担当した回数）などを基準に決める。全員顔に化粧をして、鼻筋に白い白粉を塗るが、これは魔除けのためであるという。長刀の練習は、祭りの一週間くらい前から公民館前の道路で行う。青年団の人が指導に当たる。

演技の流れは以下のようなものである。

①代表者の「上」のかけ声で進行方向に向かって右半身になり（右足を前に出す）、両手で長刀を垂直に捧げ持つ。左手で長刀の柄の根元を持ち、右手でその五〇センチほど上を握る。

②代表者の「下」のかけ声で右手と左手を握り替え（左手が右手の五〇センチほど上にくるようにする）、そのまま長刀の刃先を左上から左下へと下げ、左斜め前の地面をえぐるように下から上に向かって刃先をすくい上げる。同時に二歩前進する。

③代表者の「上」のかけ声で、進行方向に向かって左半身になり（左足を前に出す）、両手で長刀を垂直に捧げ持つ。右手で長刀の柄の根元を持ち、左手でその五〇センチほど上を握る。

④代表者の「下」のかけ声で右手と左手を握り替え（右手が左手の五〇センチほど上にくるようにする）、そのまま長刀の刃先を右上から右下へと下げ、右斜め前の地面をえぐるように下から上に向かって刃先をすくい上げる。同時に二歩前進する。

以下、同じ動作を繰り返す。露払いとしての長刀の存在は、西由岐の八幡神社祭礼の「小練り」を先導する長刀を思い起こさせる。

戦前まで、長刀のほか、西由岐の八幡神社祭礼に見られるような「お練り」の行列（毛槍など大名行列を模した行列）もあり、たいへんにぎやかであったという。獅子舞、長刀と同様に、お練りもワカイシ（青年団）が担当していた。昔は一七、八歳の青年の中からくじによって二〇～三〇人の担当者を選出した。

また、戦前まで、奥地区の農家の人が「神馬」を飾り立てて出していたが、農耕馬の消滅とともにこうした習慣も見られなくなった。馬は神輿には付いていかないで、松の木につなぎ止めていた。

一三時四〇分、神輿が御旅所に到着。神輿を御旅所に据え置くと、御旅所祭の神事が行われる。

神事終了後、餅投げを行うため、神輿かき、神社総代、当家全員が防波堤の上に上がる。まず氏子総代がテンノモチ（神前に供えてあった大型の重ね餅）を投げる。続けてビニール袋に入った紅白の餅を次々と投げ入れると、下で待ち受けていた老若男女一〇〇名あまりの人々が争って餅を奪い取る。

餅投げ終了後、神輿は御旅所を出て町内巡行に出発する。例年であれば、神社を出発した神輿はまず町内会長宅、続いて神社総代長宅に立ち寄り、それ以降は希望した人（寄付をもらった人）の家を順番に回る。しかし平成一五年の祭りでは、（人寄せのために）御旅所で臨時に餅投げを行ったため、神輿は御旅所→町内会長宅→神社総代宅→一般の家という順に立ち寄ることになった。昔は神輿が立ち寄るのは町内会長や神社総代など主立った家のみで、一般の家には行かなかった。神輿は宵宮・本祭の二日かけて氏子区域全域を回る。

神輿かきは、目指す家が近づくと、「チョーサ、チョーサ」のかけ声も勇ましく一気に走り込んだり、家の前に到着したときには「サセー」のかけ声とともに神輿を高々と差し上げたりする。神輿は家の玄関先に据え置かれ、家の人は神輿の前に御神酒などを供えて拝礼する。神輿かきには飲み物やおつまみなどが振る舞われる。以前は神職も巡幸に付いて回り、祝詞を唱えていた。

依頼があれば、たたら音頭保存会の人たち（三名）が玄関先でザイを振りながら拍子木に合わせてたたら音頭を歌ってくれる。一四日は、たたら音頭は八幡神社境内、鳥居前、橋の上、道の辻、龍王神社の前などで披露された。

小休止の後、神輿は次の家へと進んでいく。赤鬼・青鬼、長刀、大麻を持った神輿かき代表、長刀、神社総代、当家も神輿に付いて歩く。

神輿は日が暮れる頃に御旅所に到着。この日、神輿は御旅所に一晩据え置かれる。

戦前にはだんじり三台（東・西・奥）が氏子区域を巡行していたが、現在は東・西のだんじりが御旅所近くに据え置かれているのみである。かつて、三台のだんじりはそれぞれ歌を歌いながら神社を出たところの四辻に集まって来て、その後、各地区ごとに練り歩いた［徳島文理大学比較文化研究所年報編集委員会　一九八八　一二九］。昔は宵宮の晩にだんじりの前でワカイシが歌を歌った。

c．本祭（九月一五日）

翌一五日（本祭）は、午前一〇時から神輿の氏子区域巡幸が行われる。前日同様、赤鬼・青鬼、大麻、長刀、神社総代、当家などが神輿に付いて歩く。獅子舞は神輿とは別行動で、橋の上、商店の前、木岐漁協前などあ

らかじめ定められた数ヵ所で舞を披露する。

一六時、木岐漁協前（蛭子神社前）で獅子舞の披露があり、そこに神輿が練り込んでくる。その後小休止となるが、その間、神輿かき、赤鬼・青鬼、長刀の担当者らが港から海に飛び込む（飛び込まない場合には投げ込まれる）習慣がある。

その後また巡幸を続け、神輿が「宮入り」するのは二一時頃になる。昔はお入りが深夜（〇時頃）になったこともあった。神輿がお入りすると、神職と神社総代らは神社拝殿に参進。神職は警蹕をかけながら御霊代を神輿から本殿へ奉遷する。その後神職は祝詞を奏上し、祭りは終了する。

神輿の周囲には榊の枝がたくさん付けられているが、人々はこれを取って軒先に魔除けとして挿しておく習慣がある［徳島文理大学比較文化研究所年報編集委員会　一九八八　一二九］。

［資料］たたら音頭の歌詞（国定忠治）

ア　東西や　ア　東西や
ア　東西南北清めてたまえ、
おだやかに　御連中たのむ華やかに
ハー　エイエイサッサ　エイサッサ

上州名物数あれど
かかあ天下に空っ風
国定忠治の一代記
ハー　エイエイサッサ　エイサッサ

近郷近在苦しめる
悪代官をたたっ切り
こもる名月赤城山
ハー　エイエイサッサ　エイサッサ

おじ切る板割浅太郎
親分忠治のうたがいを
晴らす涙の子守唄
ハー　エイエイサッサ　エイサッサ

こもれる山も策つきて
捕手悩ます忠治らは
関所破って山下る
ハー　エイエイサッサ　エイサッサ

子分と別れ信濃路は
悪で名高い山形屋
忠治義侠の名咀可
ハー　エイエイサッサ　エイサッサ

国定忠治は鬼よりこわい
小松五郎義兼で
にっこり笑えば人を切る
ハー　エイエイサッサ　エイサッサ

恐れられたる忠治でも
病にかてず中風の
くらの中にて御用
ハー　エイエイサッサ　エイサッサ

大戸の宿ではりつけの
人は一代名は末代
国定忠治の物語
ハー　エイエイサッサ　エイサッサ

［資料］伊勢節（カッコ内は合いの手のかけ声）

サー　沖はエー　大漁で　おかは万作で
商売繁盛で
ヨイヤソーレハおめでたい
　ア　ソラ　ヤットコセーノ　ヨーイヤサ
　アレワイセ　コレワイセ
　ササー　ヨーイトセ
　ホラ　デケタン　デケタト

あら　おめでたいのがカケノウオ　（アヨイショ）
ロとロとが吸いおうて　（アヨイショ）
腹と腹とがうち解けて
ア昨年も今年も来年も　（アヨイショ）
千年も万年も
めでたづくしで
ヨイヤソーレハおめでたい
　ア　ソラ　ヤットコセーノ　ヨイヤサー
　アレワイセ　コレワイセ
　ササー　ヨイトセ
　ホラ　デケタン　デケタト

アレ　アーレ大きな鯛がほら貝で　（アヨイショ）
小さな貝がシジミ貝　（アヨイショ）
娘一七八ちゃいじりがい　（アヨイショ）
そこで一番　しっかりしっかりささんかい　（アヨイショ）
エンジン　（ソレソレ）
大漁だ　ヨイヤソーレハ
ヨイヤソーレハおめでたい
　ア　ソラ　ヤットコセーノ　ヨイヤサー
　アレワイセ　コレワイセ
　ササー　ヨイトセ
　ホラ　デケタン　デケタト

アレハセーめでたい
今日は由岐町の木岐の八幡さまにいでまして
めでた尽くしの一節を
あまり長いは耳障り
ということでお開きだ
　ア　ソラ　ヤットコセーノ　ヨイヤサー

アレワイセ　コレワイセ
ササー　ヨイトセ
めでたい　めでたい

四　志和岐・吉野神社祭礼

（一）吉野神社について

吉野神社（写真12）は海部郡由岐町志和岐浦字中の谷一七七に鎮座する。旧村社。祭神は大己貴命、広国押建金日命、春日山田姫命。

創立年代は不詳であるが、天和三年（一六八三）再建の記録がある。寛保三年（一七四三）の『阿波国神社御改帳』には「志和岐浦蔵王権現　神主無二御座一候。」［神道大系編纂会　一九八九　三四］、文化一二年（一八一五）の『阿波志』には「蔵王祠志和岐津に在り」とある。奈良県吉野の蔵王権現を祀った社と考えられる［徳島県神社庁教化委員会　一九八一　二二九］。

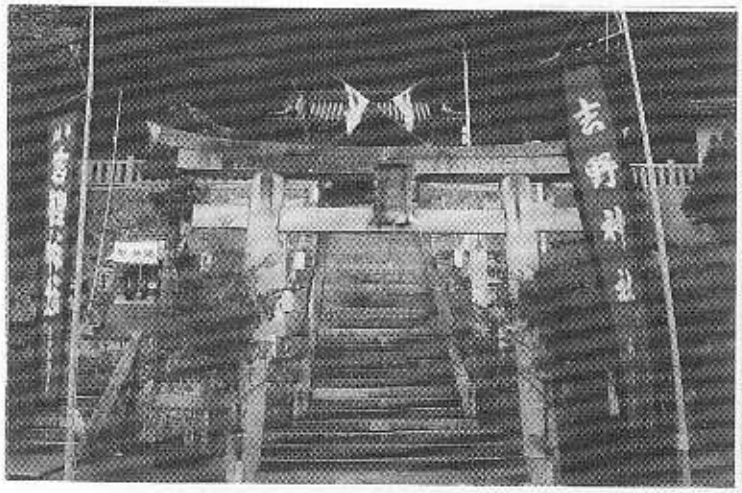

写真12　吉野神社（志和岐）

明治初年に吉野神社と改称し、戦後まもなく宗教法人になった［岡島　二〇〇〇　一四四］。

境内社に磯辺神社（祭神・豊玉姫命）、蛭子神社（祭神・事代主命）、栗島神社（祭神・少彦名命）、龍王神社（祭神・和田津美命）、飛地境内社に山神社（田井が浦、祭神・大山祇命）、住吉神社（田井が浦、祭神・底筒男命・中筒男命・上筒男命）、八坂神社（天王、祭神・須佐之男命）、厳島神社（中の谷、祭神・市寸島姫命）、地神社（天王、祭神・地神五柱神）がある［岡島　一九九七　一二九］。

（二）祭祀組織

吉野神社の氏子区域は志和岐地区全域で、氏子数は現在約一三〇戸である。昭和五六年頃の氏子数は約二〇〇戸であった［徳島県神社庁教化委員会　一九八一　二二九］。神輿のほか、だんじり、舁き太鼓など人数を必要とするものもあるため、祭りは地区総出で行っている。

吉野神社の神社総代は一名。志和岐町内会の副会長（二名）のうち一名が神社総代、もう一名が寺総代を務める。神社総代の任期は町内会役員の任期に準じ、二年となっている。神社総代は、吉野神社をはじめ志和岐の各神社（磯辺神社、蛭子神社など）の管理と祭礼の責任者となる。

そのほか神社役員として、志和岐の東・西・浜の各地区より代表が一名ずつ出る（町内会役員として。任期二年）。かつては東・西・浜の各地区より「当家」を選び、オシメ（注連縄）をなうなどの仕事をしていたが、現在は当家制度はなくなっている。

かつては、神輿やだんじりのまとめ役として「トウリョウ（頭領）」二名を置いていた。トウリョウはワカイシ（若い衆＝青年団）の総大将である。

そのほか「トウリョウ娘」四名（未婚の女性の中から選ばれる）がいて、酒と肴を持って舁き太鼓の巡行に付いて回り、食べ物やお酒の接待に当たった。現在は舁き太鼓のかき手の奥さんがリヤカーに酒と肴を載せて付いて回り、接待に当たっている。

吉野神社の秋祭りには、神輿のほか、だんじり一台、舁き太鼓一台が出る。だんじり（写真13）は権現造りの少し変わった形のもので（だんじりの前後左右に軒庇が付いている）、だんじり正面に取り付けられた木製の鳥居の社号額には「権現宮」と記されている（吉野神社は近世期より「権現さん」と称されていた）。だんじりには小学校四～六年生の男子九～一〇名が乗り込み楽を奏していたが、子供の数が少なくなったため、平成三年（一九九一）頃より巡行・奏楽は中断している。現在は、境内石段下左手に飾り付けをしただんじりを据え置くのみである。だんじりの鳴り物は、大太鼓一、締太鼓（小太鼓）二、大鼓二、小鼓二、鉦二～三という構成であった。

舁き太鼓（写真14）は、徳島県内では海部郡日和佐町日和佐浦の八幡神社（「太鼓屋台」と称する。八台）、海部郡牟岐町牟岐浦の八幡神社（一台）、海部郡由岐町志和岐の吉野神社（一台）、海部郡由岐町伊座利の新田八幡神社の計四ヵ所にしか伝えられていない。志和岐の舁き太鼓は、大正時代末～昭和初期頃に、日和佐（日和佐のどの地区かは不明）から古い太鼓屋台を譲ってもらった（購入したという話もある）と言われている。なお、日和佐の太鼓屋台のうち戎町の太鼓屋台（記録の上では日和佐でもっとも古い太鼓屋台）は、寛政七年（一七九五）に回船問屋で豪商の谷屋甚助が、京都から彫師を呼んで造ったものと伝えられている[高橋　一九九八　九]。こうした人や物の往来・交易を背景とした文化交流が、県南地方の民俗文化の特色を形成している面もある。

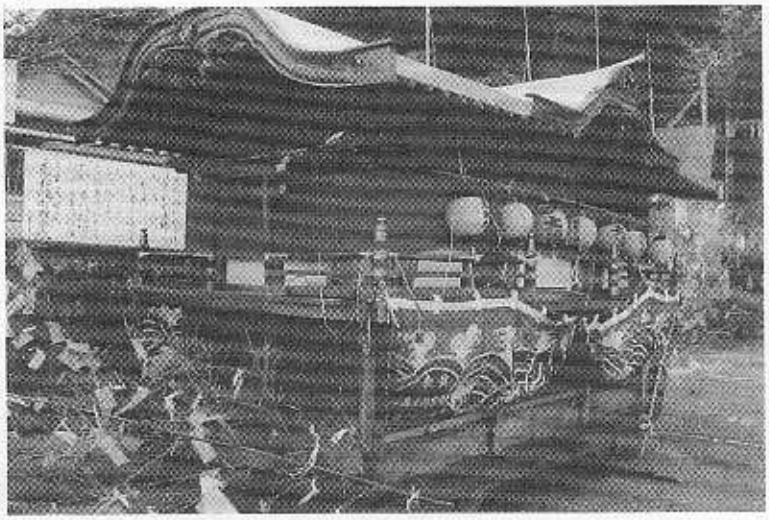

写真13　だんじり（志和岐・吉野神社）

舁き太鼓の上には小学校五、六年生の男子四名が乗り込み、中央に据えられた太鼓を叩きながら「舁き太鼓の歌」を歌った。「舁き太鼓の歌」は曲目も多く、歌詞を覚えるのが難しいため、六年生が主であった。歌は公民館（かつての青年会堂）で一ヵ月くらい練習した。ワカイシが指導に当たっていた。

かつては、両親が志和岐出身で、漁業に従事、さらに長男といった条件が揃わなければ舁き太鼓の乗り子になることができなかったが、こうした制約は次第にゆるやかになっていった。近年、子供の数が減少していく中で女子も乗り子になれるよう

写真14　舁き太鼓
（志和岐・吉野神社）

になり、年齢の幅も小学校低学年まで下がっている。低学年ではまだ小さくて歌を覚えることができないため、歌はかき手の大人に任せ、乗り子はただ太鼓を適当に叩くのみとなっている。

（三）祭りの過程

a．準備

かつては、祭りの一ヵ月ほど前から神社石段下の青年会堂（さらに古くは境内の絵馬堂―現在はない）でだんじりのお囃子の練習をした。学校が終わってから打ち子の子供たちがやって来て、主にワカイシ（青年団）が指導をした。譜面などはなく、口伝えで指導していた。お囃子の種類は一種類であった。

宵宮の前日まで一〇日くらいかけて、だんじりは地区の家々（ブク＝服喪の家を除く）を順に回っていき、お囃子を披露した。各家では子供にお菓子などを渡した。

また先述のように、舁き太鼓の乗り子の歌の練習も、祭りの一ヵ月ほど前から青年会堂で行われていた。

現在、祭りの準備としては、祭りの一週間前（平成一五年は一〇月四日）に神社石段下右手の倉庫からだんじり、神輿、幟などの道具を出して点検・修理をするという作業がある。以前は農村舞台を兼ねただんじり納屋があったが、建物が老朽化したため、一〇年ほど前に壊して現在の倉庫を建てた。

戦後間もない頃（昭和二〇年代）まで、神輿かきは宵宮の前日から神社に泊まり込み、宵宮の朝には海に入って潮で身を浄め、宵宮の晩には神輿とともに御旅所に寝泊まりした。本祭の日の朝には再び海に入って身を浄めたが、こうした習慣は現在は失われている。

b．宵宮（一〇月一一日）

祭りは古くは旧暦九月八・九日に行っていたが、後に新暦一〇月八・九日に変更になり、平成に入ってからは人が集まりやすい一〇月九日に近い土日曜に変更になった。平成一五年は、一〇月一一日（土）が宵宮、一二日（日）が本祭に当たっていた。

宵宮の日は、朝七時から神社役員らにより神社境内の掃除と準備（幟立て、だんじりや舁き太鼓の飾り付け、御旅所の設置など）が行われる。

境内石段下に大幟一対（赤地に白字で「奉納　吉野神社」と染め抜かれている。昭和三一年、志和岐婦人会の奉納）、境内から港の御旅所にかけて十数本の幟（青地に白字で「奉納　吉野神社」と染め抜かれたものと、白地に黒字で「奉納　吉野神社」と書かれたものがある）を立てる。社殿から石段にかけて小さな提灯を吊す（夜は灯をともす）。

境内の左右には掛け灯籠四基（うち三基は龍と漁船、一寸法師などの絵入り）が吊されている。掛け灯籠には夜、灯がともされる。

だんじりは上部に赤色の幕、下部に青地に白で波の模様を描いた幕が張り巡らされ、上部左右の軒下には提灯（左右七個ずつ計一四個）が吊される。まただんじりの前後の左右下部に、各一本（計四本）の笹竹を紐で縛り付け、色紙で作った短冊を飾る。だんじりは境内の石段下左手に据えておく。

舁き太鼓の屋根の四隅には赤い提灯四個（「太鼓」の文字が白抜きで書かれている。「船一同」による奉納）を飾り、御幣の付いた榊を台座の四隅に縛り付ける。中央部には太鼓を据える。舁き太鼓の下部に、前後四本、左右六本の長く太い竹のかき棒を取り付ける（かき棒が交叉するところは紐

できつく縛る)。なお舁き太鼓の上部の「布団」は五枚で、上から赤・黄・緑・ピンク・青となっており、黒の太い紐で上部を縛って固定してある。舁き太鼓は境内左手の漁協倉庫前に据え置く。

御旅所は吹き抜けの簡易テント(屋根付き)で、前面左右に笹竹、榊(一対)を縛り付け、御神燈を一個宛吊す。御旅所内には御幣や神饌などを安置する仮案、太鼓(神職が祝詞を奏上する際に使用)、賽銭箱が設置されている。港に停泊している船には、それぞれ大漁旗が掲げられる。

小休止の後、一二時三〇分より、神職(宮本篤宮司)、神社役員が拝殿内に参進、例大祭の神事が行われる。

神事終了後(一三時二〇分頃)、神職が警蹕をかけながら御霊代を本殿から神輿に奉遷する。神輿かきは白い布で神輿に胴巻きをする。

一三時三〇分、神輿の「お立ち」(巡幸出発)。以下の通り列次を組み、一同ゆっくりと石段を下りてゆく(写真15)。

①潮撒き　一名　平服。潮水の入った手桶を持ち、榊の枝で水を撒いて浄めながら行列を先導する。

②天狗　一名　天狗面、えび茶色の着物、白足袋に雪駄、手に御幣の付いた榊を持つ。天狗は適当な人に頼みに行くこともあれば、希望者にお願いすることもある。昔は病気がちの人などが志願して(厄払いのために)天狗になることもあった。

写真15　神輿(志和岐・吉野神社)
右手に見えるテントは御旅所

③三種の神器　一名　榊(上部に三種の神器が結びつけられている)を持った総代(町内会長)。スーツ姿。

④御幣　五名　スーツ姿の漁協役員(漁協組合長を含む)・町内会役員。

⑤神饌を載せた三方(一〇台)　一〇名　スーツ姿の町内会役員・漁協役員。

⑥神職　一名　宮本篤宮司。

⑦神輿　神輿かき約二〇名。

例年であれば、白いチハヤを着た神輿かき(氏子の青年)約二〇名が神輿を担ぎ、氏子区域の巡幸に出発するが、平成一五年の祭りではブク(服喪)の家が多く、神輿かきの数が足りなくなったため、神輿の巡幸は中止となった。そのためこの日は手の空いている男性(平服)が神輿を浜の近くの御旅所(神社から五〇メートルほど)まで運び、神輿を一晩御旅所に据え置いた後、翌日御旅所から本殿に戻すという対応が取られることとなった。

神輿は本来は約二〇名の青年(ワカイシ)がかく。以前は、神輿かきは未婚の男性に限られていた。神輿かきの中でも神輿の四隅に位置する四人は「ボウバナ」と呼ばれる神輿かきのリーダー格で、濃い緑色の着物を着る。

潮撒き、天狗などのお供は、石段を下りた後そのまま御旅所に向かい、御旅所の仮案に三種の神器、御幣、神饌などを据え置く。

神輿は、まず境内石段下左手の蛭子神社の前に据え置かれ、神職が祝詞

を奏上する。続いて神輿を境内左手の漁協前に移して据え置き、神職が祝詞を奏上する。神輿はさらに御旅所の前に進み、ここでも神職が祝詞を奏上する。調査当日は神輿巡幸が中止となったため、神輿は御旅所前に据え置かれたままで、この後、舁き太鼓の巡行のみが行われた。

一三時五〇分、境内に据え置かれた舁き太鼓の上に、青い法被を着た小学生（一、二年生）四名が乗り込み、中央に据えられた太鼓をランダムに叩く。それまで神輿をかいていた男性たちは、赤い鉢巻きを頭に締め、今度は舁き太鼓のかき手となる。

まず「歌い出し」が拍子木を叩きながら、「まかせ　まかせ　よいやまかせ　どっこい　どっこい　（どんでんどん）　ちょうおうせー　（どんでんどん）」（どんでんどんは太鼓の音）と歌い出す。続いて、拍子木のリズムに合わせながら、かき手は「舁き太鼓の歌」のうち「お立ち」（神輿の出発）の歌を歌う。舁き太鼓の歌は「お立ち」「お入り」（神輿の帰還）のほか、一三種類の歌がある（章末の資料参照）。「音頭出し」がレパートリーの中から適当な歌を歌い出すと、舁き太鼓のかき手がそれに唱和する。節回しはどれも同じで、メロディーというよりは、「七・五」のリズムを基本とした「唱えごと」と言った方が正確である。歌は、拍子木のリズムにあわせて、「ア、ヨイショ」といった合いの手を入れながら歌われる。以前から伝えられている歌のほか、その場の雰囲気で即興で作られる（あるいは歌詞を部分的に変えて歌われる）場合もあり、そうして歌のレパートリーが増えていく。

「お入り」は神輿が出るとき、「お立ち」は神輿が最後に神社に入るときに歌われる。そのほか、住吉さん、弁天さんが歌い込まれた歌は、それぞれの神社の下で歌われる。あとは特にどこでどの歌を歌うという決まりはない。個人の家の前で歌うときは、（祝い歌なので）その家の人の名字を入れ込んで歌ったりする。

舁き太鼓の上では子供が太鼓をドコドコと叩き続ける。男性十数名が舁き太鼓の前後左右のかき棒に付き、ゆっくりと神輿の据え置かれた漁協前まで引いて動かしていく（舁き太鼓にはタイヤが付いているので、比較的楽に動く）。

漁協前に着くと、かき手は舁き太鼓を肩に担ぎ上げ、舁き太鼓の歌を歌う。歌の最後の「それ、さーしましょ」のところで腕を伸ばして舁き太鼓を上に高々と差し上げる（舁き太鼓を上に高く差し上げる所作のことを「さす」と言う）。ここで小休止し、お酒やジュース、おつまみをとる。

舁き太鼓はその後、浜（現在は護岸工事がされているが、かつては砂浜だった）に沿った道路に出て、そのまま北に進む。道中、かき手の男性たちは舁き太鼓の歌を歌い続ける。舁き太鼓の後ろに数名の賄い役（飲食物をリヤカーで運ぶ）の女性が付いて歩く。

調査当日は神輿巡行は行われなかったが、本来、神輿は志和岐の五ヵ所のコミヤ（弁天さん、住吉さん、地神さん、祇園さん、山の神さん）、依頼のあった家、依頼のあった漁船（昔は一艘ずつ回ったが、今は港に向かって一〇～一五艘分をまとめて拝んでいる）に立ち寄る。神輿には神職が付いて歩き、止まったところで（コミヤの中には、山中など神輿が上がれない所もあるので、できるだけ近いところまで行ってその前で、家の場合は玄関先で）祝詞を奏上する。各家ではお金や御神酒を渡す。神輿の後ろには舁き太鼓が付いて進む。

平成三年頃まで、神輿の先導として、男子中学生による「ヤデサ」（お練り）の行列があった。所定の衣装を身に着け、黒毛・白毛・槍・短冊（各一対）を持った練り子が、かけ声（「アーネリコンダ」など）とともに、道具を上げたり下げたりする動作を繰り返しながら道中を進んだ。ヤデサの

隊列・動作・かけ声は、西由岐八幡神社の小練りのそれに類似しており、両者の間には影響関係があるものと思われる。神輿の後ろには昇き太鼓がお供として付き従う。

浜に沿った道路の突き当たりの「弁天さん」を臨む地点で昇き太鼓を止め、肩に担いで昇き太鼓の歌を歌いながら威勢よく差し上げ、休憩を取る。その後、神社方面に戻り、港の前に至ったところで、港に停泊している船の方向に向かって昇き太鼓を差し上げ、小休止する。この後、港の南側の防波堤のところでも同様に歌を歌いながら昇き太鼓を差し上げる。

続いて、港近くの山中にある住吉神社に向かって歌を歌いながら昇き太鼓を差し上げる。このように、昇き太鼓は神輿に続いて志和岐内のコミヤ（漁業関係のものが多い）、港の船舶、さらには依頼があった家の前で止まり、歌を歌って気勢を上げる（写真16）。

例年であれば、神輿、昇き太鼓は一六時三〇分頃に御旅所に入り、神輿を御旅所に据え置き、神職が祝詞を奏上するという流れになるが、この日はあいにく強い雨が降り出したため（昇き太鼓の布団が雨に濡れると困るため）、一五時頃に巡行を切り上げ、昇き太鼓と境内に据えてあっただんじりはそれぞれの倉庫に収納、漁協前に据えてあった神輿は御旅所に移動した。御旅所の前で神職が神輿に向かい太鼓を叩きながら祝詞を奏上し（神社役員が参列）、この日の行事は終了した。

写真16　昇き太鼓の巡行（志和岐・吉野神社）

だんじりは、現在は祭りの期間中石段下の広場左手にずっと据え置かれており、動かすことはないが、以前は宵宮の日の午後、神輿がお立ちした後に綱を引いて浜の御旅所の近くまで引いていき、一晩そこに据え置き、本祭の日に神輿がお入りした後、神社に戻った。以前は海岸が砂浜であったため、だんじりの輪（車輪）が砂に食い込み、太い綱を使って五〇～六〇人で引っ張った。戦前は、だんじりの前でたたら節を歌い、ワカイシが囃してにぎわった。

c．本祭

翌一二日は本祭。朝九時に昇き太鼓が神社を出発し、地区の中を巡行する。例年であれば御旅所を出た神輿に昇き太鼓がお供をするという形をとるが、平成一五年の秋祭りでは神輿巡幸が中止となったため、昇き太鼓が単独で地区内を巡行した。前日同様、「昇き太鼓の歌」を歌いながら地区内を巡行し、所定のコミヤ、依頼のあった家の前で止まり、酒や肴を取りつつ小休止し、また進んでいく。

午前中の巡行が終了した後、一時間ほど休憩を入れ、一三時頃より再び昇き太鼓の巡行を再開、一六時頃に「お入り」となる。まず御旅所から神輿が神社にお入りした後、昇き太鼓がお入りをする。お入りの際には、昇き太鼓のかき手が「お入り」の歌を歌う。

神職が御霊代を神輿から本殿に奉遷し、祝詞を奏上するとすべての行事が終了する。

翌一三日は「竜宮祭り」（龍王神社の祭り）。朝七時より神職によるご祈

祷がある。その後八時三〇分～一一時まで志和岐地区の共楽運動会が開かれ、午後から祭りの後かたづけが行われる。

［資料］「吉野神社お祭り　舁き太鼓の唄」（町内会作成の小冊子。橋本俊一氏提供）

まかせ　まかせ　よいやまかせ　どっこい　どっこい
どんでんどん　ちょうおうせー　どんでんどん
　お立ち
一つ日の出に　鶴が舞う
二つ福の神が　くるように
三つみなさん　うれしかろ
四つ世の中　おさまって
五ついつでも　はんじょう笑いがお
六つ胸の中も　良いように
七つ何でも　はんじょして
八つやまいを　とりすてて
九つここらで　さーしましょ

住吉はまべのたかどうろ　出てみて沖をながむれば
七福神の楽あそび　なかでも恵比寿と言う人は
こがねの針で鯛釣って　一そうも二そうも釣り上げて
魚釣ざおで　さーしましょ

阿波の南の志和岐むら　いくら田舎にありとても
文化こうじょう発展に　町内会長せんとうに
それから漁業共同組合長　あるいは多くの役員さん
協力一致でどりょくして　明るい町を築き上げ
一番よいとこ志和岐むら
志和岐発展　さーしましょ

志和岐の祭りは日よりよし　氏神さまはよしのみや
村の娘さん　きりょうよし　きりょうが良いのに　衣装もち
そこで若い衆　ほれるの　無理は無い
すえは夫婦で　さーしましょ

むかしむかしそのむかし　むさしの国の弁慶が
ひふみよ五つ六つ　七つ道具をせなにおい
五条の橋で　さーしましょ

ニコニコがおの恵比寿さん　沖へ漕ぎ出す魚釣り
竿を申せば吉野竹　糸はひゅうがの絹の糸　えさはシラスで金のはり
大きな鯛を釣り上げて　もとのごてんに帰られた
めでためでたで　さーしましょ

一でめでたい鯛のうお　二でにっこりにべのうお
三でさいろや　四でしまあじや
五ついわしや　六つむろのうお
七つないらげ　八つやよがます
九つこのしろ　十でとびうお

飛ばした飛ばした　飛ばした
弁天ひよりを見たならば
朝日ごこうが　さーしましょ

一で出雲のおおやしろ　二でにっこり東照宮
三でさぬきの金毘羅さん　四で志和岐の氏神さん
かよう船路の守り神
今日の祭りに　さーしましょ

阿波の南の由岐の町　雪もふらずに暖かく
人の心もなごやかに　春をまたずに花が咲く
志和岐はってん　さーしましょ

阿波の南の海部郡　東のはしは由岐の町
我が由岐町を見渡せば
東の部落は阿部伊座利　西のほうには由岐と木岐
その真ん中に我が志和岐　東も西も北も山
南は海にかこまれた　せまい天地にそだっても
心はとおく南海の　はとう万里の太平洋　海の方向ゆめにみて
ひろい心で　さーしましょ

志和岐の名所数えると　北にせんたつさんとさん
南に波切るごやのはな　東にいぶきの潮吹きで
西にいずつのせんじょじき　秋はお芋で冬はうみ
いかの大漁で　さーしましょ

ここらで一つ唄います　志和岐の沖を見渡せば
大型小型の優秀船　船いっぱいに海のさち
つんで港に入り舟だ
大漁をしらすサイレンが　浦うらまでも鳴りひびく
めでためでたで　さーしましょ

東のそらがあかねいろ　金ぱ銀ぱの水平線
みるみる登る初日の出　これが志和岐のいきおいだ
肉類自由か何のその　漁協役員がんばって　ようとん事業大成功
漁船もしだいに大型化　優秀船の勢ぞろい　きのうもきょうも大漁旗
みなとめざして宝船　白波けって入船だ
大漁だいりょで　さーしましょ

今日は志和岐の村祭り　氏神さんはよしのみや
おいもわかきもおさなきも　氏子の人は浜に出て
家内あんぜんだいりょうや　交通あんぜん事故もなく
しょうばいはんじょう神参り
ねがって太鼓を　さーしましょ

お入り
あれ見よいりふね宝船　福の神の宝船
しろがねのほばしらに　にしきの帆をまきあげて
志和岐をさしていりふねだ　こごとこごとの福の神
めでためでたで　さーしましょ

五　伊座利・新田八幡神社祭礼

（一）新田八幡神社について

新田八幡神社（写真17）は海部郡由岐町伊座利字向山一の一に鎮座する。旧村社。祭神は品陀和気命、気長足姫命、武内宿禰命。

創立年代は不詳。寛保三年（一七四三）の『阿波国神社御改帳』に「伊座利浦新田八幡宮　別当　伊座利村浦極楽寺」と見える［財団法人神道大系編纂会　一九八九　三四］。明治初年に現社号に改め、戦後まもなく宗教法人になった。

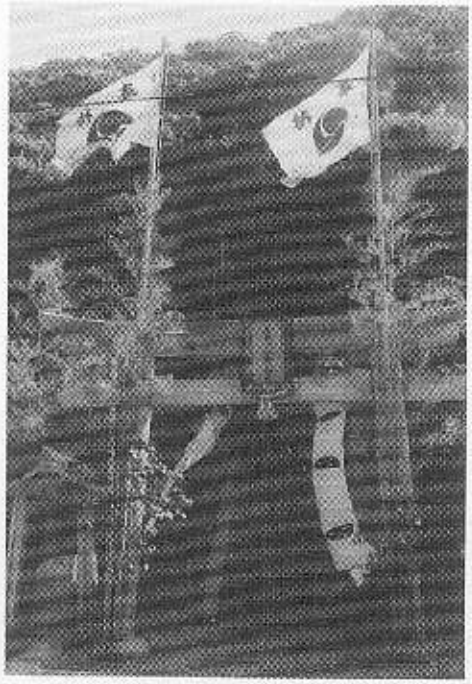

写真17　新田八幡神社（伊座利）

境内社に大神神社（祭神・天照大神）、住吉神社、地神社、飛地境内社に蛭子神社（伊座利三四六の一、例祭一〇月一六日）、山神社（伊座利三四七の一、例祭一〇月一六日）がある［岡島　一九九七　一二九］。

（二）祭祀組織

伊座利では町内会の役員（総代七名）が神社総代・寺総代を兼任している。総代の任期は定まっておらず、中には四〇年あまり務めている人もいる。

祭りの当家（とうや）は、伊座利町内の四つの地区（新田町［神社のお膝元］、向山町、片山町、奥地町［川の西側の地区、昔は家数が少なかった］）から一軒宛て、計四名が出る。各地区に当家の幟があり、当家に当たった家では一〇月一日より家の前に幟を立てる。

神輿かきはワカイシ（青年男子）一六名。以前は中学生くらいから神輿をかいていた。かつては伊座利の四地区からそれぞれ神輿かきを選出していたが、近年はワカイシの数が減ったため、該当者（伊座利の青年）の中から年齢順に（上から）決めている。神輿かきのリーダー格を「スズフリ」という。御旅所などで神事を行っている間、神輿の四隅に吊された鈴を振って鳴らすことからこの名称がある。

太鼓（舁き太鼓）の打ち子は小学五、六年生の男子四名。各町から適当な年齢の子供を推薦してもらう。打ち子はネルのような生地の衣装を着ている。以前は顔に化粧をして乗っていたが、現在は素面である。打ち子は舁き太鼓の中央に置かれた太鼓の周りに座り、二本のバチで所定のお囃子を叩く。太鼓の叩き方には、神輿のお供をするときと、しないときの二種類の叩き方がある。

七〇年くらい前まで、小型の「子供太鼓」があった。子供太鼓には、普通の太鼓と同様、「布団」の飾りもあった。

かつては宵宮と本祭の両日、関船が神社と浜の間を往復していた。関船には小学生二名が乗り込み、「関船ひっぱるぞ」と言うと鉦一、太鼓一を叩いた。関船の下部には輪（車輪）が四つと、舵取りのハンドルが付いていた。関船は三〇年ほど前まで引き出していたが、傷みがひどくなったため

出なくなった。現在は部品をばらした状態で、神社石段下の「伊座利資料館」横の倉庫に保管してある。

伊座利資料館には、かつての伊座利の祭りのにぎわいを伝える絵馬が保存されている。「大正五年丙辰一〇月吉日奉納」「大阪黒金橋・絵馬藤筆」の墨書があり、神輿、太鼓、関船のほか、お供の行列の中には大名行列、獅子舞などの姿も見える（写真18）。

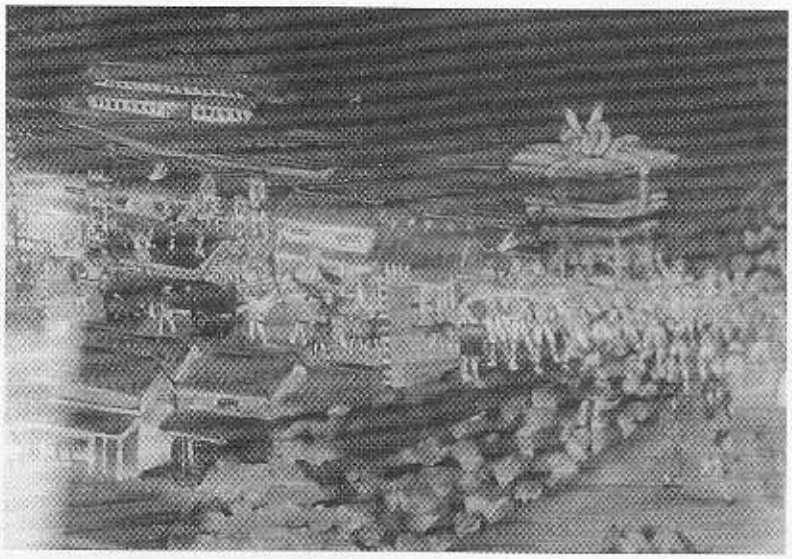

写真18　奉納絵馬（部分）（伊座利資料館蔵）

（三）祭りの過程

a．準備

新田八幡神社の例祭は一〇月一四（宵宮）・一五日（本祭）だが、戦前は一三日の「足ならし」から一八日まで祭りが続いた［徳島県神社庁教化委員会　一九八一　二二九］。

以前は、祭りの一週間くらい前から太鼓の練習をした。伊座利資料館裏手の井戸端で、太鼓をかくワカイシ（青年団）が指導していた。以前はひき臼を太鼓代わりに、山から切ってきた長さ五センチくらいの木をバチ代わりにして練習をしていた。

戦後しばらくまで、ヘヤゴモリ（部屋籠もり）といって、当家、スズフリ、獅子、天狗など役持ちの人は「宿」（現在の伊座利資料館の裏手にあった）に籠もった。家には帰らず、食事も自分たちで作っていた。一二日頃から海に入って体を浄めた。

戦前まで、祭りが来ると、娘が心を寄せる男の腕に「腕まもり」と称する絹や錦糸で作った長さ五〇センチほど、幅三センチほどの美しい布を結びつける風習があった［徳島県神社庁教化委員会　一九八一　二二九］［佐藤　一九八二　二〇四～二〇五］。これは、男性が思慕する娘に前もって作ってくれるよう頼む場合もあった［佐藤　一九八二　二〇五］。伊座利の祭り歌にも、「娘なにする　行灯の影で　ヤレ可愛い殿御の　腕守り」というように腕まもりのことが歌われている［徳島県教育委員会　一九八九　二三八］。

b．宵宮（一〇月一四日）

宵宮の日は、朝から神社総代と当家が神社に集まり、神社の拝殿や境内の清掃、旗・幟立て（石段登り口、神輿の通り道など）、幕張り（神社拝殿、神社石段両側）、神輿や太鼓の飾り付けなどの準備を行う。神輿と太鼓は、普段は神社石段下左手の倉庫に保管されている。

一四時、神職、神社総代、当家、神輿かき代表らが拝殿に参進、着座、例大祭の神事が行われる。神事終了後、神職は警蹕とともに御霊代を本殿から神輿に奉遷する。

一六名の神輿かき（白の上下の浄衣、白鉢巻き、白足袋に草鞋姿）によ

って担がれた神輿は神社を出て、浜の御旅所の方に向かっていく。ただしこの日は御旅所に止まることはなく、浜の手前でUターンして神社方面へと戻っていく。

神輿は一五時過ぎに神社石段下の倉庫に戻る。以前は神輿を一晩御旅所に据え置き、夜通し太鼓が打ち鳴らされ、当家の者は神輿のもとで一夜を明かした［徳島県神社庁教化委員会　一九八一　二二九］。

続いて打ち子四名を載せた太鼓（成人男性二〇人くらいでかく）が神社下を出発し、浜の近く（防波堤の手前）まで行って戻ってきて、この日の行事は終了する。現在の堤防ができる前は浜（天然の砂浜）があり、太鼓は浜まで出ていた。

c．本祭（一〇月一五日）

本祭の日は一一時三〇分頃に打ち子の子供たちが集まってきて、太鼓の上に上がり、太鼓を叩きながら歌を歌う練習をする。太鼓の四隅の角には葉の付いたままの笹竹（各一本）を結びつける。

一二時、神社総代、当家、神輿のお供らが着替えを済ませて神社石段下の倉庫前の広場に集合、お立ち（神輿出発）の準備をする。

写真19　神輿巡幸（伊座利・新田八幡神社）

一二時三〇分より、倉庫内に据えられた神輿の前で神事が行われる。神職（宮本篤宮司）のほか、神社総代、当家、神輿かき、神輿巡幸のお供など、祭りの参加者全員が倉庫の前に座って参列する。

一三時、神事終了。神輿が倉庫を出て浜の御旅所に向かう（写真19）。新田八幡神社の祭神は女性の神様なので、暴れ神輿ではないといい、巡行も静かである。

神輿巡幸には、潮撒き一名（榊の枝で潮水を撒き、道中を浄める）、天狗二名（青天狗・赤天狗。先端に榊を結びつけた長い棒を持ち、ホラ貝を吹きながら進む。神輿の先導役）、獅子四名（二頭）、スーツ姿で三種の神器を持った町内会長、袴を着て金幣を持った神社総代、御幣を持った当家、神職が付き従う。神輿の位置は、潮撒き・天狗・獅子・三種の神器の後である。獅子頭は以前から神社に残されていたが、舞い方が伝わっていなかったため、二〇年くらい前に徳島県海部郡海南町四方原の原谷さんという人に教えてもらい、しばらく中学生が舞っていたが、現在はまた中断しており、子供が獅子頭を持って神輿に従うのみとなっている（写真20）。獅子は二頭立てで、子供が叩く小さめの太鼓もあった。なお、御旅所祭の神事で使う玉串や神

写真20 獅子（伊座利・新田八幡神社）

饌は、唐櫃に納め、別途トラックで御旅所まで運ぶ。

一三時二〇分、神輿が浜に設けられた御旅所に到着する。御旅所の四隅には笹竹が立てられ、新田八幡神社の紋を染め抜いた幕がコの字型に張られている。幕は前面が開放されており、ここから神輿が入る。浜に停泊した船には、それぞれ大漁旗が掲げられている。

御旅所に神輿を据え置き、神輿の周りに獅子頭や神幸具を並べる。神輿の前に神饌を並べ、御旅所祭の神事が行われる（写真21）。神職は神輿に向かって祝詞を奏上し、神社総代らによる玉串の奉納がある。

写真21　御旅所祭の神事（伊座利・新田八幡神社）

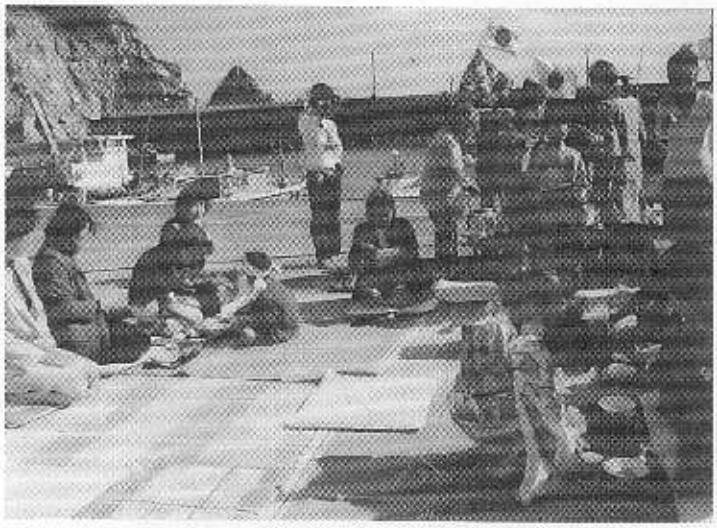

写真22　茶菓の接待（伊座利・新田八幡神社）

神事終了後、浜で一時間ほど休息する。その間、神輿かきは自ら海に飛び込んだり、人（神輿かきやお供の子供）を海に投げ込んだりして盛り上がるが、こうした習慣は昔はなかったという。

浜ではござを引いて、着物を着た小学生女子が茶菓の接待に当たる。これも古風な習慣である（写真22）。

一五時頃、神輿が御旅所を出て、神社へと戻っていく。神輿は鳥居をくぐり石段を上がっていき、拝殿前に据え置かれる。神職は警蹕とともに神輿から御霊代を取り出し、本殿に奉還する。御霊代を抜いた空の神輿を神輿かきが石段下の倉庫に納める。

神輿が「お入り」した後、太鼓が神社（下の倉庫前）と浜の間を往復する。伊座利は道が狭いため、神輿や太鼓が地区内を巡行したり、家々を回るということはなく、神社と浜（御旅所）の間の広い道を往復するだけである。

太鼓の上には打ち子の子供四人が乗り込み、「ソレ　ちょおせー　ドンドンドン」と太鼓を叩き続ける。

神輿かきのワカイシのうち四人が、太鼓の四隅

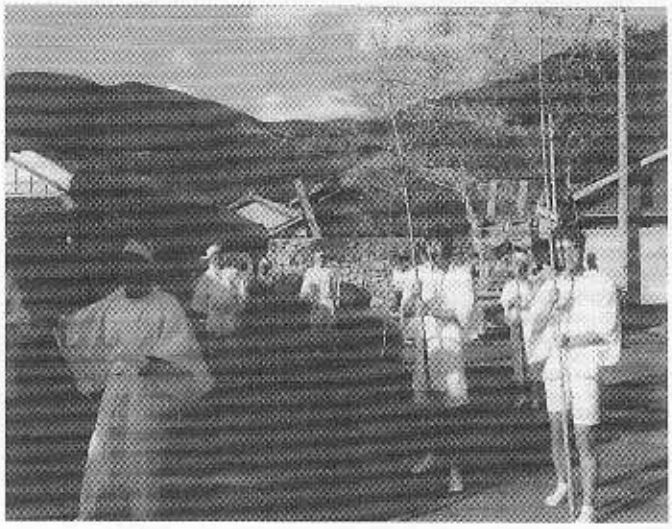

写真23　踊り出しの歌（伊座利・新田八幡神社）

に縛り付けられていた葉の付いた笹竹（長さ約三メートル）を取り外して垂直に持ち、太鼓の前に横に並ぶ。「歌い出し」の男性が拍子木を叩きながら「踊り出しの歌」（章末資料参照）を歌い出すと、笹竹を持ったワカイシは拍子木のリズムに合わせて笹竹の根元の部分を地面に打ち付けながら、浜の方にゆっくりと進んでいく（写真23）。踊り出しの歌は、歌詞・歌の旋律から判断すると、伊勢節の変化したものと考えられる。

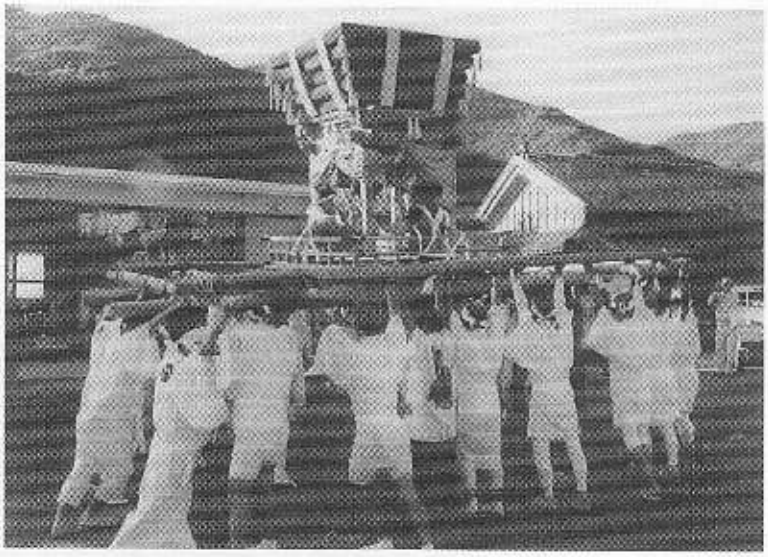

写真24　太鼓（伊座利・新田八幡神社）

ワカイシが折り返して倉庫前に戻ってきたところで、太鼓（舁き太鼓）が出発する（写真24）。太鼓の上では、打ち子が「ソレ　ちょおせー（ドンドンドン）」といったお囃子を入れ続ける。

太鼓のかき手は、太鼓をかきながら随時「太鼓の歌」（数曲あるうちの一曲）を歌い、上に乗った子供がその曲に対応した「返し歌」を歌う。太鼓の歌は節回しというものは特になく、「七・五」を基本とした唱えごとといった方が正確である。歌の掛け合いは次のような形で行われる。

ちょおせー（ドンドンドン）　ちょおせー（ドンドンドン）
（十数回繰り返す）
頃は十月秋仲ば　（かき手）
もみじの葉も色染めて　（打ち子）
涼しきなぎさの浜辺にも　（かき手）
楽しき時がおとずれて　（打ち子）
年に一度のお祭りも　（かき手）
村中あげて大騒ぎ　（打ち子）
酒笑の上で酒笑の上で　（かき手）
楽しむ秋の日は暮れる　（打ち子）

章末資料に示したように歌の種類はたいへん多く、子供が覚えきれないので、実際にはその中から二、三の歌を選んで事前に練習し、祭り当日に歌う形をとっている（昔は全部覚えたという）。

浜に行くまでの道の途中、太鼓は二、三ヵ所で止まり、太鼓を斜めに（シーソーのように）傾け、威勢よく太鼓の歌を歌う。

神社下の倉庫前に戻った太鼓は、しばらく激しく回ったり前後に揺れたりして、再び浜の方向に進んでいく。防波堤の手前で折り返し、また神社方面に戻っていく。

倉庫前に戻った太鼓は、中で打たれる太鼓のリズムに合わせ、激しく前後に揺れたり、ぐるぐる回ったり、かき手が「サセー、サセー」のかけ声とともに太鼓を高々と上に差し上げたりして盛り上がる。最後に激しく太鼓を叩き、激しく練った後、その場に太鼓を据え置いて、祭りは終了となる。

［資料］踊り出しの歌［徳島県教育委員会　一九八九　二三八］

氏子よれよれ　ハヨーイヨイ　塗舟が出るぞ　ヤレヨーホイセー
ソーコセー　ヤレ　碇取りやんせ　ソーレハサー　お若衆
ヤレ　ヨーホイセー　ソーコセ

娘何する　行灯の影で　ヤレ　可愛い殿御の　腕守り

若の祭りか　祇園の市か　ヤレ　ただしゃ堺の　住吉か

ここの屋形は栄える　ヤレしだれ柳が　庭をはく

今日の祭りに　扇をひろて
ヤレ　開いてみれば　若松の
根笹に鶴が　舞い遊ぶ
ヤレ　末は鶴亀　五葉の松

ここはどこかと　馬衆にとえば
やれここかいな　ここは立江の地蔵さん
一丁ばかりでうちもどり　色酒博打をたしなんで
親に孝行をすればいい

やれ　やれ　親に孝行な三吉が
絞りの手拭いほうかぶり　可愛い声をはりあげて
坂は照る照る　鈴鹿は曇る

ヤレ　合の土山　しぐれ降る

［資料］太鼓の歌（伊座利資料館蔵の冊子『太鼓乃歌』［伊座利青年団、昭和三四年一〇月秋祭新調］による）

処は河内の金剛山
　其の名も高き千早城
守るは楠正成公
　時の帝の命を受け
八十余万の賊兵を
　藁人形や二重塀
大木大石なげつけて
　敵をさんざんなやましぬ
菊水御旗で菊水御旗で
　忠勇古今にたぐいなし

一の谷
　九郎判官義経は
　鵯越を攻め落し
　続いて屋島壇の浦
遂に平家を亡ぼしぬ
　源氏の白旗威勢よし
頼朝天下で頼朝天下で
　鎌倉山に月清し

昔元禄十五年
　時は師走の中ば頃
降り積む雪のその中を
　赤垣源造重賢は
まんじゅ笠に赤合羽
　酒の機嫌の千鳥足
兄の屋敷へ急ぎ行く
　折柄兄は不在故
着物に酒をそなえつつ
　泪を呑んでいとまごい
徳利の別れで徳利の別れで
　忠臣義士と名も高し

おごる平家をほろぼして
　手柄を立てし義経も
兄頼朝ににくまれて
　奥洲さして落て行く
お供に従う面々は
　亀井片岡伊勢駿河
中にも名高き弁慶は
　安宅の関の難関を
勧進帳で勧進帳で
　さすがの義経血の泪
遂に平家を亡ぼしぬ

頃は正平三つの年
　賊の大将師道は
数万の大軍引連れて
　吉野をさして攻め来る
ここに楠正行は
　急ぎ吉野に参内し
如意輪堂の壁板に
　辞世残して立向う
四条畷四条畷
　忠臣孝子の誉あり

ねらみつめたる勘平が
　どんと放した二つ玉
お軽はくるわへ身を売り
　御主の御用に立金
ゆうをにまかせて押行けば
　手の鳴る方へと逃げて行く
茶屋場の盃で茶屋場の盃で

かつて香りし名香は
　顔世が手なりし御兜
二つ巴の定紋宇
　木の身が上でらくらくと
指も出したる短冊は
　あもみが上でさよ衣も

榊の枝で榊の枝で

信長が
　阿能の局や蘭丸に
酒をつがせて居る処
　それとみかけて光秀
味方を引き連れ攻め来る
　遂に信長亡ぼされ
大音声で大音声で
　光秀こそは主殺し

忠教が
　一夜の宿に泊るれば
それと見かけて梶原が
　味方を引連れて攻め来る
梶原こそは追い散らし
　後の方より六弥太が
流しの枝で流しの枝で
　平家は一夜

昔々其の昔
　神世の初め山々に
背山の方は古賀の助
　ヒナ鳥見るより走るより
のう古賀さんかなつかしや

お前に逢いたさ顔見たさ
云えども声は谷川の
　恋路の文のかしわぎの
桜の枝で桜の枝で

七福神の船遊び
　ほていほくろく櫂をさす
ぴしゃもん次郎が錨取る
　大黒天が帆をまかる
中で蛭子が鯛を釣る
　弁天日和を見給えば
朝日に御光で朝日に御光で
　治まる御世こそ目出度けれ

日向のおどの立花は
　あをきが原でみそぎ行く
異国大事の神風は
　祈れば一度に吹きかえす
夕暮春のその時は
　露も千年の時分けて
よをもにひろう初紅葉
　松も千年のみどりにて
ときわの秋の緑のを
　御光の車に早め行く
異国のとどめで異国のとどめで

冬の景色ながむれば
　沖に大船帆かけ船
りんごん浜辺を打ちながめ
　蛭子の松は鳥居松
新田の月は松の月
　浦は谷々水が良し
処の名所で処の名所で
　浦は次第に富貴なし
明治十年春二月
　処は肥後の熊本で
音に聞えた田原坂
　西郷と官軍陣をしき
互に勝負で互に勝負で

頃は天保の中の頃
　義と侠の二字に名をあげ
侠（きょう）血（けつ）国定忠治こそ
　百三十余村の人々を
助けんものと赤城山
　関八洲のもののふを
向に廻し愛刀の
　小松の五郎義兼は
こやをすべって鮮血に
　修羅乱刀屍や

赤城の山を切り抜けて
　奥洲地へとさすらいの
天保の侠客で天保の侠客で
　赤城の山に露深し

源平須磨の戦いに
　花もつぼみの敦盛が
連戦あし毛にまたがって
　いとも健げな働きに
平山武者の末重は
　浜辺をさして逃げて行く
折柄山の彼方より
　権太栗毛にむち打って
追いかけ来たる熊谷が
　軍扇あげてさし招く
大音声で大音声で
　げに武士の名も高し

丸橋が
　堀の深さをためさんと
小石を投げてはかる時
　通りかかった伊豆守
南無三仕舞ったと笠かぶり
　酔うたふりして千鳥足
丸橋忠弥で丸橋忠弥で

徳川武士の目を覚す

徳島藩の秘密をば
　さぐらんものと徳川が
隠密甲賀弱見をば
　徳島藩に入込ます
遂に甲賀は捕へられ
　剣の山に取りこもる
助けんものと法月が
　苦心さんたん如何ばかり
鳴門秘帳で鳴門秘帳で
　鳴門の渦に謎深し

明治時代に名を揚げて
　世界中の人の助け人
日本の医学を海外に
　発展させしその人は
野口英世で野口英世で
　世界の医学を栄行く

河内山
　首尾よくなみえを助け出し
其れと見かけて北村が
　僧俊待てと呼び帰す
僧俊後を振りかえり
　我は宮家の使僧なり
云へば大陸血の涙
　徳川武士は柔弱で
天保の六花撰で天保の六花撰で
　僧俊こそは立役者

頃は天正十三年
　秀吉軍勢引受けて
坂本城が危しと
　報に接して左馬の助
琵琶湖に馬を乗入れて
　末世に誉を残したり
水色桔梗で水色桔梗で
　今尚人の語り草

頃は十月秋仲ば
　もみじの葉にも色染めて
涼しきなぎさの浜辺にも
　楽しき時が訪れて
年に一度のお祭も
　村中揚げて大騒ぎ
酒笑の上で酒笑の上で
　楽しむ秋の日は暮る

東亜戦争終結乃

ポツダム宣言受託なし
憲法改正発布なし
八仟万の同胞は
再建日本で再建日本で
明朗日本に邁進す

伊賀の助
天一坊を盛り立てて
徳川天下を乱さんと
其れとにらんだ越前が
悪状あばいて再調べ
遂に悪事は露見なし
徳川天下で徳川天下で
越前こそは名奉行

[謝辞]
今回の調査では多くの方々にお世話になりました。特にお世話になった方々のお名前を以下に記し、謝意を表します。
蒲生哲也氏（木岐町内会会長）、賀川末夫氏（木岐八幡神社総代）、大田善紀氏（志和岐町内会会長）、橋本俊一氏（志和岐町内会副会長）、森本繁春氏（志和岐吉野神社総代）、磯田友春氏（伊座利町内会会長）、浜大吾郎氏（由岐町役場）、真南卓哉氏（由岐町教育委員会）。

[付記]
本稿は、平成一五年度文部科学省地域貢献特別支援事業費に基づく研究成果の一部である。

注
(1) 西由岐の八幡神社祭礼については、詳細な調査報告書（高橋晋一 二〇〇四 『西由岐八幡神社祭礼』 徳島大学総合科学部文化人類学研究室）を別途刊行している。
(2) 神輿巡幸に鬼が供奉する例は、徳島県内では県南地方の一部（阿南市、由岐町、日和佐町の一部）にしか見られないようである。徳島県内では、多くの地域で猿田彦（天狗）が神輿を先導する。
(3) 那賀川町原、羽ノ浦町東傍示の獅子舞の特色は、獅子がヤグラに登るという演技を伴うことであるが［高嶋 二〇〇三］、この演技は木岐には伝承されていない。
(4) 徳島県内の山車は、担ぐタイプ（屋台、太鼓）と引くタイプ（だんじり、関船）に大きく二分される。担ぐタイプの山車は一般に「屋台」と呼ばれるが、屋根の上に「布団」を載せた形のものは特に「太鼓」「舁き太鼓」と呼ばれる。その分布は県南の海岸地方に限定されている。

参考文献
岡島隆夫編著 一九九七 『阿波の祭礼と神事（稿本）』 岡島隆夫

岡島隆夫編編著　二〇〇〇　『阿波の神々と祭り　三』　岡島隆夫
海部郡教育研究所編　一九六七　『海部の祭』　海部郡教育研究所
角川日本地名大辞典編纂委員会編　一九八六　『角川日本地名大辞典　徳島県』　角川書店
佐藤文哉　一九八二　「徳島県南部における宗教儀礼と社会組織」　石躍胤央・高橋啓編『徳島の研究六（方言・民俗篇）』　清文堂出版　一六三～二〇九
神道大系編纂会編　一九八九　『神道大系　神社編四二　阿波・讃岐・伊予・土佐国』　神道大系編纂会
高嶋賢二　二〇〇三　「梯子獅子舞の芸態成立に関する一考察―徳島県那賀郡羽ノ浦町・那賀川町の事例から」　『徳島地域文化研究』一　一一〇～一二七
高橋晋一編　一九九八　『日和佐八幡神社祭礼／徳島の結婚』　徳島大学総合科学部文化人類学研究室
高橋晋一　二〇〇四　『西由岐八幡神社祭礼』　徳島大学総合科学部文化人類学研究室
徳島県神社庁教化委員会編　一九八一　『徳島県神社誌』　徳島県神社庁
徳島県教育委員会編　一九八九　『徳島県の民謡―徳島県民謡緊急調査報告書』　徳島県教育委員会
徳島県教育委員会編　一九九八　『徳島県の民俗芸能―徳島県民俗芸能緊急調査報告書』　徳島県教育委員会
徳島文理大学比較文化研究所年報編集委員会編　一九八八　『由岐の民俗』（比較文化調査報告二）　徳島文理大学比較文化研究所年報編集委員会
由岐町史編纂委員会編　一九八五　『由岐町史　上巻（地域編）』　由岐町教育委員会
由岐町史編纂委員会編　一九九四　『由岐町史　下巻（図説・通史編）』　由岐町教育委員会

（〒七七〇―八五〇二　徳島市南常三島町一―一　徳島大学総合科学部）